cinema twitter

『４分間のピアニスト』

・大変よかったです。深い重みのある演技でした。
・ヨーロッパ映画はやはりよいです。
・あんなに堅いピアノ教師が、真剣に考えた結果がとても気の利いたジョークに思えたり……。脚本がよい上に役者の味が加わり、久しぶりに映画を見た気になりました。「きちんとしたおじぎ」ができましたね、ジェニー。
・今までに観たことのない映画でした。ジェニーのように、ストレートに表に感情を出せるのがうらやましく思えた。暗いエンディングなのが心残りでした。
・主役のクリューガー先生がかっこよかったです。ピアノの演奏の音がずっと耳に残っています。
・最後の４分間がクライマックスと言うことは観る前からわかっていましたが、あのような演奏をするとは意外でした。でも、先生も認めて頷き、ジェニーが深々とお辞儀をしたシーンには涙が出ました。私は、現代のＣＧを使った映画があまり好きではありません。このように、人の心の奥深くや生き様を描いた映画には本当に心を打たれます。
・とてもよかったです。知らない映画を観れてうれしいです。
・思ったよりよかった。
・久しぶりの映画でした。初めはドキっとしましたが、最後は感動と、そのごどうなったかを感じさせる映画でした。
・若い人の考え方や行動について考えさせられました。
・重いテーマがとてもいい映画だった。

『4 分間のピアニスト』の上映については、ハッピーなエンディングでないことや、観慣れていないテーマであることなど、スタッフの間でも意見が分かれました。皆様のご感想で、新しい映画も受け入れられるのだと納得しました。

問題です！
B.B はブリジット・バルドー
M.M はマリリン・モンロー
では、C.C は？

最近観た映画（1～2月）

・『さよならドビュッシー』
名古屋が舞台なのでよかった。
・『トムボーイ』
・『レ・ミゼラブル』
・『ストロベリーナイト』
最高によかった。今まで観た映画の中で１番かも。邦画の上映を期待しています。
・『レ・ミゼラブル』
人生を感じ、重々しくよかったと思う。
・『レ・ミゼラブル』
たまには映画でもと思って、でも疲れて途中で出て、最後ごろに観て帰った。映画はそんなに好きではないのかも。期待はずれが多いけど、期待が大きすぎるのかな……。

『レ・ミゼラブル』は、劇場で観た方も多かったようですね。いつかりぶらでも上映できるといいなぁと思います。

その他

・前回の映画（グレン・ミラー物語）もすてきでした。
・いつも楽しみにしています。
・森繁さんの「社長太平記シリーズ」を希望しています。

残念ですが、ホールで上映できる作品ではありません。

・席を立つのはエンドロールが終わり、会場が明るくなってからがいいなと思いました。せっかくの劇場の雰囲気をもっと味わってほしいですね。

スタッフからも是非お願いします！
暗いうちに席を立つのはとても危険です。
映画の余韻も楽しんでください！

皆様の投稿をお待ちしています！　市民活動コーナー入り口のメールボックスに入れてください。

2013.4.18
vol.23

『夜の騎士道』

シネマ・ド・りぶらの
コラム・ド・シネマ

もう一つの「騎士道」

36 歳の若さでこの世を去った主役のジェラール・フィリップは、フランスのジェームズ・ディーンと呼ばれ、フランスを代表する二枚目スターです。ジェラール・フィリップには、もうひとつ「騎士道」を冠する『花咲ける騎士道』（Fanfan la Tulipe：1952 年）があります。

『夜の騎士道』には新人のブリジット・バルドーが出演していますが、『花咲ける騎士道』にはイタリア女優ジーナ・ロロブリジーダが出演し、ファンファンの役を演じたのち、愛称が「ファンファン」と呼ばれるようになりました。

ちなみに、フランス生まれの俳優「岡田眞澄」は、ジェラール・フィリップにあやかって、愛称を「ファンファン」と名付けられました。　au

騎士道と武士道

この映画は 1955 年、『巴里の屋根の下』『巴里祭』でお馴染みのルネ・クレール監督による独特なコメディー・ラブロマンスです。テンポの良さと分かりやすいストーリーでしたが、ハッピーエンドかよく分からない終わり方など、フランス的な楽しい映画であった。

「騎士道」と「武士道」について「ウィキペディア」で調べてみた。

「騎士」とは、本来「騎馬」に乗って戦う戦士の意味であったが、中世以降貴族階級の一種として定着していった。「弱者への敬意と憐れみ、弱者を擁護する確固たる気構え」などの『騎士道十戒』があり、権威・名誉によって決められる無私な行動こそが騎士道の根底であり、戦士としての権威のために勇敢でなくてはならず、そのため「退却」「撤退」という行動は理念に反する。

「武士道」とは、道徳大系としては「君に忠、親に孝、自らを節すること厳しく、下位の者に仁慈を似てし、敵には憐れみをかけ、私欲を忌み公正を尊び、富貴よりも名誉を以て貴しとなす」ものとして、日本精神の精華と称えられた。

「武士道」は、明治以降徐々にその伝統は衰え、今日ではほとんど消え去ったかに思う。石原慎太郎氏は『父なくして国たたず』（光文社）で、次のように訴えています。

「日本固有の文化があるようでなくなってしまった本質的混乱が到来しようとしている今の日本で、家庭を建て直し社会を建て直し、国家を建て直していこうという時にわれわれは、宗教などを超えて、われわれのごく近い先祖が尊崇し、評価し、憧れた武士道というものの本髄がなんであったということをもう一度考え直してみるべきではないだろうか。」　S.N

“ファッシネーション（魅惑のワルツ）”

今回上映の『夜の騎士道（1955 年）』は、「シネマ・ド・りぶら」では第 12 回の『巴里祭（1933 年）』に続いて、2 回目のルネ・クレール監督作品です。この 2 作品の間には第二次世界大戦を含む四半世紀が経過していますが、共に「お互いの本心が疑われ続ける恋物語」、「全編を流れる音楽がナレーションのように使われている」という強い共通点があり、こんな軽いタッチのロマンティック・コメディーでも、決して手を抜かないクレールのこだわりが印象的です。

見所は「ジェラール・フィリップの天真爛漫な色男ぶり」「ミシェル・モルガンの冷ややかに熟れた美しさ」「軽妙なタッチで綴られる恋の駆け引き」「しゃれた会話と笑いの中にさりげなく仕込まれる皮肉と風刺」など一杯ありますが、お勧めは、この作品の真ん中あたり、ルイーズに軽くあしらわれ続けて、当惑の極にあったアルマンが、初めてルイーズの本心に気付く、2 度目のダンスのシーンです。

フィリップとモーガンの息の合ったダンスはなかなか魅力的です。バックに流れるメロディーは、何と、ご存知 “ファッシネーション（魅惑のワルツ）” ！！　あのメロデイーの採用は、オードリー・ヘップバーン、ゲイリー・クーパー、モーリス・シュヴァリエのアメリカ映画『昼下がりの情事（1957 年）』が初めてではなかったのですね。

調べてみると” ファッシネーション” が作られたのは 1904 年。作曲者は、フェルモ・ダンテ・マルケッティ。もともとのタイトルは“ヴァルス・ツィガーヌ（ジプシーのワルツ）”で、パリのカフェのオーケストラのために作られ、その後フランス語詞が付けられてシャンソンとして愛好されていたとか。

この曲については、popfreak さんのブログ “♪ blowin’ in the music (ミュージックつれづれ草)” が動画付で、ジェーン・モーガン、美空ひばり、アンディー・ウィリアムス、ナット・キング・コールの” ファッシネーション” を聞かせてくれます。素晴らしいブログなので是非アプローチをお勧めします。　K.M.
→ http://ameblo.jp/popfreak/entry-11437523541.html

『夜の騎士道』フィルムデータ

原　題　：Les Grandes Manoeuvres
製作年　：1956 年
制作国　：フランス
上映時間：108 分、モノクロ

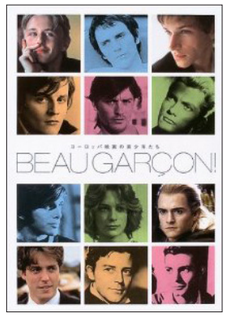
監督・脚本：ルネ・クレール
音楽：ジョルジュ・ヴァン・パリス
出演：ジェラール・フィリップ、ミシェル・モルガン 、ジャン・ドザイ 、ブリジット・バルドー

りぶらサポータープロジェクト　「シネマ・ド・りぶら」

『夜の騎士道』 関連図書案内 & DVD

ルネ・クレール

778.　武田 潔　早稲田大学出版部
『明るい鏡 - ルネ・クレールの逆説』



ジェラール・フィリップ

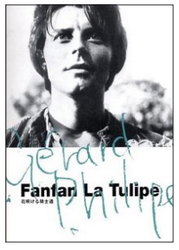
778.23　エスクァイアマガジンジャパン
『Beau garçon! ヨーロッパ映画の美少年たち』

『赤と黒』

『狂熱の孤独』

『危険な関係』

『すべての道はローマへ』



『花咲ける騎士道』

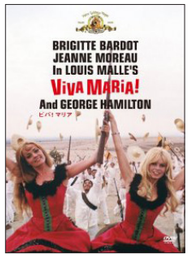
『七つの大罪』

ブリジット・バルドー

778.235　ブリジット・バルドー
早川書房
『ブリジット・バルドー
　自伝イニシャルは BB 』

159.6　タニア・シュリー／編　講談社
『私だって言ってみたい！
　人生が楽になる女たちの名文句』

304　ブリジット・バルドー
阪急コミュニケーションズ
『ブリジット・バルドー怒りと絶望 』



『ビバ！マリア』

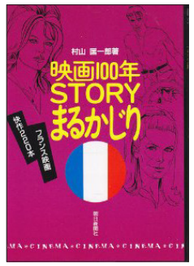
『素直な悪女』

字幕とせりふ

778.235　山崎 剛太郎　春秋社
『一秒四文字の決断
　セリフから覗くフランス映画』

778.09　高三 啓輔　白水社
『字幕の名工
　秘田余四郎とフランス映画』

フランス映画



778.2　朝日新聞社
『映画 100 年 STORY まるかじり　フランス篇 』

778.235　山田 宏一　　平凡社
『わがフランス映画誌 』

778.235　中条 省平　集英社新書
『フランス映画史の誘惑 』

778.04　立川 談志
朝日新聞出版
『談志映画噺 』

778.04　　日本経済評論社
ピエール・マイヨー
『フランス映画の社会史 』

778.2　植草 甚一　晶文社
『シネマディクト J の映画散歩　フランス編』

778.04　中条 省平　清流出版
『中条省平の秘かな愉しみ 』

778　池波 正太郎　文芸春秋
『フランス映画旅行』